栞集を読む

松岡　隆子

枇杷咲くやいよいよゆるき身のこなし　醍醐喜美枝

〈ゆるき身のこなし〉とは豊かに齢を重ねた人ならではの感慨と言えよう。年老いてくると動作が緩慢になり何をするにも時間がかかるようになるが、それは加齢に伴う現象であり嘆くほどのことでもない。老いを素直に受け入れることは、老いをよりよく生きることだと聞いたことがある。人は誰もいずれ老いてゆく。枇杷の花のようにひそやかに咲き、雅に香っていたいものだ。

旅の荷を解くや紅葉の零れ落つ　大庭　安代

猛威をふるっていた新型コロナウイルス感染症の第五波が収束の兆しを見せ緊急事態宣言が解除された昨年の秋、また旅を楽しめるようになった。大庭さんも早速旅に出られたようだ。長い自粛生活が続いただけに、旅の解放感は格別だったことだろう。旅鞄から零れ落ちた一枚の紅葉は旅の思い出の一つ、大切に句帳に挟む。書きとめた俳句を読み返しながら旅の余韻に浸るひと時もまたよいものだ。

拾へども限なく降りて朴落葉　芝　京子

令和元年八月号の「栞集」に、〈家苞に添へたるものに朴の花〉がある。朴の花を家苞に添えるという優雅な心遣いに心惹かれた。朴は花もさることながら青葉も美しい。令和二年に上梓された句集『朴青葉』では〈美しきもの包みたし朴青葉〉と詠まれている。

落葉は落葉で圧倒的な存在感がある。樹下に散り敷く夥しい落葉の嵩に風が吹き荒ぶさまなどは身の竦む思いがする。山中では崩れて土に還るまでだが、庭木の場合は放っておくわけにもいくまい。限なく降りしきる大きな葉をひたすら拾い集めることとなる。朴の木と共に四季折々の暮しがある。

寒椿赤し祝ぎごとつぎつぎと　堀　真智子

寒気のなかに咲く真っ赤な椿は人の心を惹きつける美しさがある。凛として気品もあり祝いの席に相応しい。次々と続く祝い事は結婚式に限らず出産祝い、合格祝い、新築祝いなど様々であろう。祝い事がある度に一つ、二つと花を増やしていく寒椿に慶びが重なる。

傍に居て欲しき人ゐぬ初時雨　安達みわ子

〈手のぬくみ残し夫逝く浅き冬〉。ご夫君が他界されたのは令和二年の十一月だった。翌年二月号巻頭の悼句は忘れ難